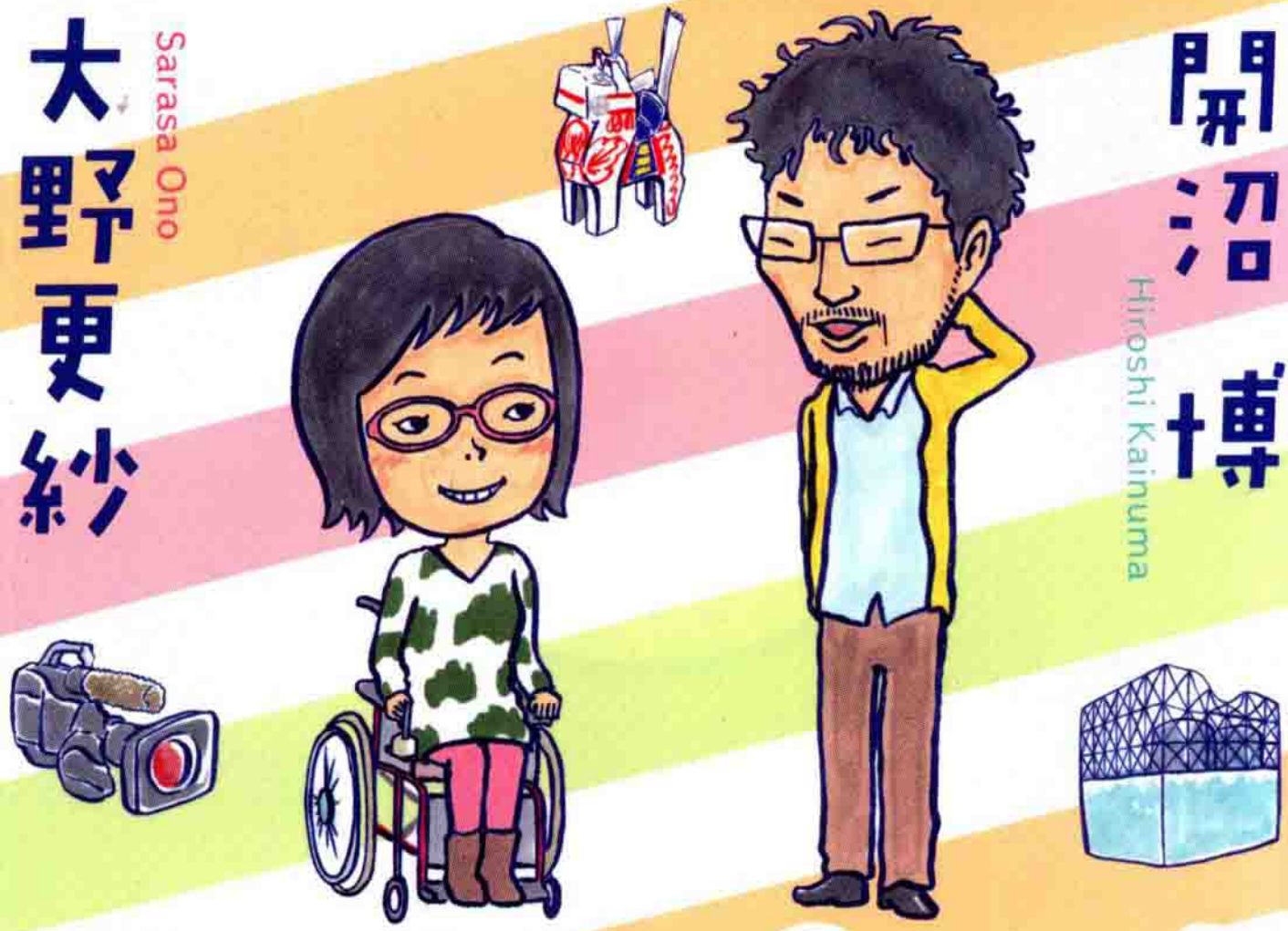
大野更紗
Sarasa Ono

開沼博
Hiroshi Kainuma



1984
フクシマに生まれて

講談社文庫

講談社文庫

1984 フクシマに生まれて

大野更紗 | 開沼 博

講談社

|著者| 大野更紗　1984年、福島県生まれ。作家。明治学院大学大学院社会学研究科 博士前期課程在籍。上智大学在学中にビルマ（ミャンマー）難民に出会い、支援活動に没頭。同大学の大学院に進学した2008年に自己免疫疾患系の難病にかかり、現在も闘病中である。発病から退院までをユーモア溢れる筆致で綴った『困ってるひと』（ポプラ社）で、2011年6月に作家デビュー。同作で、「（池田晶子記念）わたくし、つまりNobody賞」を受賞。他の著書に『さらさらさん』（ポプラ社）など。

|著者| 開沼 博　1984年、福島県生まれ。福島大学特任研究員。東京大学大学院学際情報学府 博士課程在籍。専攻は社会学。福島の原発を通して、中央と地方の関係に鋭く切り込んだ修士論文が、『「フクシマ」論 原子力ムラはなぜ生まれたのか』（青土社）として2011年6月に出版され、毎日出版文化賞を受賞。他の著書に『フクシマの正義 「日本の変わらなさ」との闘い』（幻冬舎）、『漂白される社会』（ダイヤモンド社）など。

1984（いちきゅうはちよん） フクシマに生（う）まれて

大野更紗（おおのさらさ）｜開沼 博（かいぬま ひろし）

© Sarasa Ono, Hiroshi Kainuma 2014

講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年2月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲

発行所——株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001

電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615

Printed in Japan

デザイン—菊地信義

本文データ制作—講談社デジタル製作部

印刷———慶昌堂印刷株式会社

製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277763-6

目次 contents

はじめに　大野更紗 …… 5

対談

大野更紗×開沼博
大野更紗と開沼博のつくりかた …… 13

鼎談

〈ゲスト〉川口有美子（日本ALS協会理事）
難病でも生きてていいんだ！ …… 55

〈ゲスト〉駒崎弘樹（認定NPO法人フローレンス代表理事）
日本人の一万分の一が立ち上がれば、社会は変えられる …… 103

〈ゲスト〉小鷹昌明（南相馬市立総合病院医師）
原発にいちばん近い病院に移籍して …… 149

〈ゲスト〉
森達也（映画監督・作家）
この国の人たちは、もっと自分に絶望したほうがいい……193

〈ゲスト〉
茂木健一郎（脳科学者）
「システムを変えてから」じゃ、間に合わない……245

〈ゲスト〉
金富隆（TBS報道局チーフディレクター）
筑紫哲也的なるものの行方……293

おわりに
開沼博……335

講談社文庫

1984 フクシマに生まれて

大野更紗 | 開沼 博

講談社

目次 contents

はじめに　大野更紗 …… 5

対談

大野更紗×開沼博
大野更紗と開沼博のつくりかた …… 13

鼎談

〈ゲスト〉川口有美子（日本ALS協会理事）
難病でも生きてていいんだ！ …… 55

〈ゲスト〉駒崎弘樹（認定NPO法人フローレンス代表理事）
日本人の一万分の一が立ち上がれば、社会は変えられる …… 103

〈ゲスト〉小鷹昌明（南相馬市立総合病院医師）
原発にいちばん近い病院に移籍して …… 149

〈ゲスト〉
森達也（映画監督・作家）
この国の人たちは、もっと自分に絶望したほうがいい……193

〈ゲスト〉
茂木健一郎（脳科学者）
「システムを変えてから」じゃ、間に合わない……245

〈ゲスト〉
金富隆（TBS報道局チーフディレクター）
筑紫哲也的なるものの行方……293

おわりに
開沼博……335

装幀　坂野公一（welle design）
装画　能町みね子
構成　吉田友美
写真　講談社写真部（斎藤浩・嶋田礼奈・村田克己）

はじめに

大野更紗

開沼博さんとわたしの共通点は、二つしかありません。１９８４年に、福島県で生まれていることです。

「１９８４」という数字は、リリカルかつ寓話的です。ジョージ・オーウエルは、遺作としてこの年代をそのままタイトルにした小説を書きました。ハルキ・ムラカミも、この年代をモチーフとして長編を書いています。

29年間、どういう時代を生きてきたか、と問われて、一言で答えることは難しいです。「共有体験」のようなものがあるとしたら、阪神・淡路大震災とそれに続くオウム事件。強烈だったのはやはり、9・11でしょうか。

こういうレールの上をあるけば生きていけるとか、このとおりにすればうまくゆくとか、そういうモノゴトは儚（はかな）く崩れ去っていきました。

「今までとは違う」時代をどうやって生きるのか、社会の仕組みをどう変えるのか、自分たちで考えなくてはならないと言われ続けてはいるものの、いまだその手がかりすらつかめません。いつも、混沌の最中にいる感覚があります。

わたしには、福島県に所縁を持つ二人の祖父がおります。二人とも大正生まれで、しかし対照的な「ふつうの人びと」でした。

母方の祖父の家は、福島第一原子力発電所からほど近くにあります。祖父は浪江（なみえ）町の、地元の反原発運動家でした。郵便局が旧逓信（ていしん）省の管轄下にあった時代、「ゼンテイ（全逓）」で組合運動をしながら、原発の立地計画が町にやってきた頃から烈火の如く反対をしていました。「そんなものとは、隣近所で共存はできない」と、はっきりものを言う人でした。小学校しか出ていないけれど「トラ・トラ・トラ」とか「ニイタカヤマノボレ」とか、分厚い、小難しい本が好きでした。定年で退職するまで、郵便局員としては一介の配達員でした。

いっぽう父方の祖父は、「農民」でした。戦時召集され、南方へ、フィリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ピンへ行きました。捕虜になって、しばらくマニラにいたそうです。ようやっと引き揚げてきても、田村市の山がちな開墾地、猫の額ほどの耕作地ではもはや農業で生業を成り立たせるのは無理でした。みな、食べていかれない時代です。東京へ出て出稼ぎし、タバコ栽培など現金になる耕作を始めたりもしました。そして役場勤めをしながら畑を耕す、兼業農家になりました。

家の周囲ではつねに古いものと新しいものが交差し、格闘していました。気兼ねすることばかりで、特に若いお嫁さんの苦労といったらもうそれは重苦しいものがあったと聞きます。原発のすぐそばで育ち、東京に出て高等教育を受けて「革新的勤め人」となった母は、山郷の慣習を高度経済成長とともに突っかえす世代でした。野良仕事はやらず、朝から晩までホワイトカラーの労働に明け暮れる母が、父方の家に嫁いできて一番最初にしたことは、自らの賃金でもって土間やカマドの残る古い家屋を改造することだったそうです。それでも、わたしが小学校にあがる頃までは、まだ薪のボイラーを使っていたので、祖父は依然として薪割りを続けていました。お湯を出すたびにイチイチ「じいちゃん、お湯〜！」と大声を出し

て火を焚いてもらっていたのです。

祖父らから数えると三世代目のわたしは、彼らと比べて、圧倒的に自由でした。みな新しい世代には楽観的で寛容で、今さら百姓になれとも言わず、長女として代々の土地を継げとも言わず、ただ、現代にあって自立して生きていけるようにとしか言われませんでした。

鬼籍に入って久しい二人の祖父を思い出すと、表現し難いような懐かしさとともに、ただ生活をするという営みの苛烈さへの記憶がないまぜになって、「言葉にならない気持ち」になります。

２０１１年3月11日。短い時間に、福島県に多くのことが起きました。あまりにも沢山のことがあって、言葉にするにはよほどの時間が必要なように思います。そして言葉になるまでのその間、忘れないでいなければなりません。でも、たまには忘れる時間もなければ、日々の生活をやり過ごすこともできません。

原発震災の地で生活する両親や親族のすがたを、三年間ほど東京から見守りながら、発すべき言葉もないまま、これまで過ごしてきました。わた

し自身が、原発震災というものの全体像を、いまだ捉えきれずにいます。

とどまり、生きる術を探し続けてゆくべきなのか、代々の土地と生業を捨て、根こそぎ離散してゆくべきか。そんなことを誰が、決められるというのでしょうか。自分にできることといえば、たまに気まぐれに部外者として訪ね、忍耐強く、話に耳を傾けることくらいしかありません。

それでも、あまりにひどいことが多いですから原発震災について「何かを言わなければならない」という責任感に似た気持ちと「言う資格もない」という呵責がないまぜになって、勝手に苦しくなるのです。

開沼さんも、震災後、同じような気持ちを幾度か抱いたのではないでしょうか。これはご本人に訊ねたわけではなく、わたしの勝手な邪推に過ぎません。背負うには重すぎる荷を、否応なしに負って、もはやこの身からおろす術はないのです。「当事者になる」ということは、ある日突然、回復しようもない、取り戻しようもない、嵐の只中に放り込まれることです。

開沼さんと本をつくることになって、タイトルには「フクシマ」というカタカナの表記を使おうと考えました。

今この瞬間も、被災し続けながら、消費され変化し続けながら、分断され傷つきながら、それでもなお地上に存在し人が暮らしている空間を表現する言葉を、わたしはほかに思いつかなかったからです。

生まれ育ったかつてのふるさとは、日々変貌しています。母が、浪江町の家へ一時帰宅して、祖父の位牌と一緒に持ってきた祖母の着物は、線量計を近づけると数値が一気に上がります。避難生活を続ける祖母にこれだけでもせめて渡そうと、洗ったのですが、線量は高いままです。

失ったものは、多すぎます。もはや、そのまま取り戻すことは叶わないでしょう。「復興」とは一体、なんなのでしょうか。いまだ答えはないままです。

この本は、震災後の日本社会のキーマンたち、率直に「会ってみたい」と思った人たちと実際にお会いして話した「鼎談」を集めたものです。

振り返るとずいぶん長時間、開沼さんと話をしたと思います。二人とも、原発震災については渦中の当事者でもあります。先の見通しもなく、延々と被災をし続けるような状況下でした。惑い、何が起きているのかす

ら見失いそうになる中で、とにかく定期的に会って話をし続けました。

そして原発震災とは直接的にはあまり関係のない、とりとめのない世間話を多くしました。これらの世間話は、福島に由縁を持つ者がこの間、正気を保ち、生き延びるために、必要な作業だったように思います。

震災後、目の前の事態に対処することに必死で、焼け焦げるように走り続けてきました。当事者は、逃げたくてもその場から逃げることはできません。これからもずっと、走り続けなければならないのですが。

四年目の「フクシマ」を前にして。偶然、１９８４年にあの地で生まれ、この社会で生きてきた二人が話し尽くした記録です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com